

# 心和得天真

大歳小学校 学校だより

平成26年 1月

～心和して天真を得る～

## 「あいさつ&見守り」よろしくお願いいたします。

2014年、3学期が始まり、寒風の中を子どもたちはがんばって登校しています。日によっては氷点下になることもあるのですが、中にはかなり大きめの氷を大事そうに学校まで抱えてくる子もいます。決して安全ではない通学路ですから心配にもなるのですが、「子どもは風の子」という言葉を思い出す一瞬でもあり、少しうれしくもあります。

さて先日、大歳地区の各家庭に右のようなプリントが配布されたことと思います。このプリントは、鴻南中学校区地域協育ネット推進本部が発行しており、「鴻南中学校区地域協育ネット あいさつ&見守りカレンダー」というタイトルが付いています。

地域協育ネットの重点事業として、子どもたちの登下校時に合わせた「あいさつ運動」を進めるため、学校の下校時刻を地域の皆様にお知らせするものです。保護者の皆様、地域の皆様には、犬の散歩やウォーキング、買い物などを登下校の時間帯に合わせていただいて、子どもたちと出会う機会を増やし、見守りを兼ねての「あいさつ運動」へのご協力をよろしくお願いいたします。



本校では、年間2回の学校評価アンケートをお願いしていますが、「あいさつや言葉遣い」に関する質問項目では、児童は8割以上が「できている」と回答し、保護者や教職員は「不十分」と考えているという結果が出ています。どうやら、「あいさつは、目上の人に対して、まず自分から進んですべきもの」「相手にしっかり伝わる声の大きさで」「表情も重要」などといった点が、大人が感じる不十分さの原因となっているようです。

あいさつ運動を盛り上げる中で、子どもたちがこうした行動を無理なく当たり前身に付けていってくれることを期待しているところです。

### 折々の話

一月五日は「小寒」、二十日は「大寒」。この時期、一年のうちで最も寒い時期に当たるのだから、昔の人の季節を感じる能力の鋭さに驚く◆本校の登校風景も一面冬である。ジャンパーや手袋で身を固めた子どもたちは、少し背中を丸め、視線もやや下向きになる◆先日、道路に雪が積もったときには、かなり凍っており、転んでもかなり凍って続出した。交通事故が心配されたが、自動車運転される方が十分に用心をされたおかげで、事故もなく一日を過ごすことができました。◆そんな寒い寒さの中でも、しっかりと口を開けて「おはようございます」と自分から声を出す子どもがいる。校門で子どもたちを迎えていて心が温まる瞬間である。こっちも負けじと声を出すとも温まる◆自分以外の誰かを幸せにする◆だが、人間の責任の一つだとして、「あいさつ」は、その責任を果たすための、小さいけれど重要なアイテムなのだと改めて思う。

# 成績(点数)と行動の関係について

昨年10月末に、山口県の全ての小中学校で「学力定着状況確認問題」が実施されました。子どもたちは、教科のテストと学習や生活に関するアンケートの2つのことを行いました。

その中で、とても興味深い調査結果が出ています。それは、「あなたは、授業の中で分からないことがあったら、どうすることが多いですか」というアンケートです。

- 1 **その場で先生にきくことが多い。**
- 2 **授業が終わってから先生にききに行くことが多い。**
- 3 **友達にきくことが多い。**
- 4 **家の人にきくことが多い。**
- 5 **自分で調べるが多い。**
- 6 **そのまましておく。(何もしない)**

子どもたちは、上の1～6のいずれかを選択して回答します。集計では、同じ回答をした子どもだけを集めて、その子たちのテストの平均点を出しています。つまり、勉強が分からないとき、どういう行動をする子のポイントが高いか(成績が良いか)がこの集計で分かるのです。

成績との関係を見る前に、山口市の子どもは1～6のどれを選んでいるのでしょうか。3～5年生は、「4家の人にきく」が最も多いのです。6年生になると「3友達にきく」が多くなります。家族よりもむしろ自分自身や友人に意識を持ち始める心の発達の様子を読み取れます。

さて、次が授業で分からないことがあったときの行動と成績の関係を表した表です。

右の表を見てよく分かるのは、「5自分で調べる」という行動を選んだ子どもの点数が高いということです。やはり、自分で何とかしようとする姿勢が必要だということが分かります。

また、「4家の人」の影響が大きいということも分かります。家の人に質問し、教えてもらうことが、子どもの自信につながるのかもしれません。

「6何もしない」と回答したのは、どの学年でも20人に1人の割合でとても少ないのです。しかし、このグループの点数は、他と比べて極端に低くなっています。(平均で10点近くの差)

これらのことから、「分からないとき」に何らかの行動を起こすことがとても大切だということがわかります。家でも学校でも「分からないんだけど・・・」と自分から行動を起こすことは、分かるようになる・できるようになる上で欠かせない行動なのです。

|     |           | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 |
|-----|-----------|----|----|----|----|
| 国語科 | 高い↑<br>点数 | 3  | 5  | 5  | 5  |
|     |           | 4  | 2  | 2  | 4  |
|     |           | 5  | 4  | 4  | 2  |
|     | ↓低い       | 1  | 3  | 3  | 1  |
|     |           | 2  | 1  | 1  | 3  |
|     |           | 6  | 6  | 6  | 6  |
| 算数科 | 高い↑<br>点数 | 3  | 2  | 5  | 5  |
|     |           | 1  | 5  | 2  | 4  |
|     |           | 5  | 1  | 4  | 2  |
|     | ↓低い       | 4  | 4  | 1  | 1  |
|     |           | 2  | 3  | 3  | 3  |
|     |           | 6  | 6  | 6  | 6  |

本校では、3年生以上の算数で少人数指導を行い、教室には2人の先生がいます。そうすることで、「分かりません」が言いやすい環境を作ろうとしています。

また、本校では、新学期当初から「子どもが能動的に動き出す授業～「分からない」と言える子どもの姿を求めて～」というテーマを掲げて、教員全員で授業作りの研究をしてきました。今回の調査結果を見るにつけ、重要な取組だったと改めて思っているところです。



教室に2人の先生